

コラム：31 広島カープ

(2014・5・13)

彼は遠目にも、それとわかるほどの大男であった。満員の球場内の大声援の渦の中心に立つ彼を、3万人が見つめていた。2球ほどファウルが続く。声と打音の大音響に消されて、打球音は全く聞こえない。3球目が投げられた！次の瞬間、巨体が鋭く動いた！白球が大きく空に向かって舞い上がる！「ヤッターー！」轟音のような大歓声とともに、白球は青空に弾道を描き、レフト側1階席の私に向かってグングンと伸びてくる。頭上のはるか上空を過ぎ、2階席の上に消えた！皆立ち上がっている！両手を上げ、歓喜と衝撃に大声を発し、わけのわからぬ興奮に酔いしれて、赤く染まった観客席が帯となつてうねり、スタンドが大きく揺れていた……



4月27日の日曜日、広島一巨人戦のデーゲーム。0対0で向えた延長11回の裏、ノーアウト1-3塁の場面での、主砲エルドレッド選手のサヨナラ3ランホームーの話である。午後1時に開始した試合は、マエケン(前田健太)と内海という両エースの好投で、ともに譲らず0行進のまま試合は延長戦に。投手戦とはいえ、客席で見ている方は、点が入りそうで入らないストレスのたまる試合であった。隣に座っている野球通の長男の「次はスライダーで外していくで。見とってや」などという「プロ解説」を聞きつつも、私はウトウトと眠くなる始末。延長11回の表、巨人の攻撃が終わった時に、彼が関西弁でつぶやく。「この感じやったら、引き分けかもしれへんな」……そのような「もどかしく退屈な試合」に耐えた後の、まさに目の覚めるようなサヨナラ大ホームランだった。このような流れがあったからこそ、カープファンは、より興奮し、感動し、勝利に酔いしれたのである。

「スポーツ観戦は筋書きのないドラマだ」とよく言われる。すばらしい感動と心地よい興奮を体験させてくれることもあるが、このようなことは、むしろ稀であると言ってよい。年に3-4回程度の野球観戦しかない私の体験から考えても、そう言える。今回の試合に応援に来た、圧倒的に少数派の巨人ファン(1割程度?)のように、落胆と悔しさを抱えて帰途に就くことも多い。映画や演劇のように、あらかじめ前評判を調べた上で行くのであれば、それほどハズレはないであろうが、野球の場合はそうはいかない。逆転サヨナラで勝つこともあれば、その逆もありうる。一方的な大差で敗北、というようなボロボロの試合を見せられることもある。しかし、それでもファンは球場へ行くのである。

どうして球場に行くのか？それはあの独特の「球場の雰囲気」にあるのかもしれませんが。「カープが勝ってほしい」という一点のみで繋がった大集団に入ることの楽しさ、その中に入って、声援し応援バットを叩き、立ち上がり、万歳をして、共に喜び、ともに悔しがる。人の心には、集団の中に入って「共にあることを確認したい」という欲求があるのでしょうか。かき氷、ポップコーン、カープうどん、そして私の好きな生ビール、大空に風船が舞い上がり、応援歌と球場の風が流れていく……ここは、3歳の女の子が来ても、眠って食べて騒いで、十分楽しめる不思議な空間なのです。



近頃、広島のかで囁かれる会話。広島市内のとある居酒屋で、二人の男が酒を交わしている。

クマ「どうなっとるんかいの。カープは強いいう」

ハチ「今年は本物よ。このまいくかもしれんでえ！」

クマ「(首をかしげて)ほいじゃが、そうしたら困ることもあるかもしれんいう」

ハチ「(驚いて)おまえも冴えんことを言ういう。どうしてなら？」

クマ「優勝したら、選手の給料を上げたらなーいけんじゃろうが？」

ハチ「そりゃそうじゃ。ほいじゃがカープはゼニがないんじゃけえ、えっと上 げられんわいの」

クマ「そういうことよ。なかにはよそのチームへ行くモンも出るかもしれんで。今まで何べんもあつたことなんじゃけえいう」

ハチ「ゼニがないいうのは辛いいう。(天を仰いで)なんとかならんもんかのう」

そうは言っても、やっぱり今年は広島カープに優勝してほしいですね。

(5月14日現在 広島は2位に3ゲーム差をつけて首位を独走！)

♪～空を泳げと 天もまた胸を開く

今日のこの時を 確かに戦い～♪

♪～はるか高く はるかに高く 栄光の旗を立てよ

カープ カープ カープ広島 広島カープ～♪

「カープ応援歌」より



広島カープは「日本一の貧乏球団」と言われますね。この日の勝利の記事とともに、下欄に各球団の選手年棒が載っていました。これによると、巨人が断トツの1位で、広島は11位、残念ながら(?)現在はビリではないのです。しかし、かつては本当に貧しかったのですよ。それは昭和25年の設立当時から、親会社をもたない官民一体の形で設立されたチームであったからなのです。その後、資金難のため、何度も解散の危機はありましたが、ファンの募金などで支えて、ここまでできたのです。それゆえ、カープファンには「ワシらの球団」という意識が他球団よりも強いのですよ。広島カープが胸を張って誇れることは、12球団の中で唯一、球団名に「広島」という地名が、しっかりと付いていることでしょうね。

地元球団を応援するのは、地方のパワーをアピールし、郷土を誇らしく思うからでしょうが、地方に住む人間の、都会人に対するコンプレックスもあるかもしれませんね。特に広島のカープファンには、それを感じます。相手が巨人になると「異常に燃える」という心理の底には、地方の中央に対する「負けるもんか」という気概があると思いますよ。それでいいのです。地方の底力は、そこから生まれ、日本全体が活性化するのですから。なにしろ、年棒総額で巨人は広島の2.5倍、1軍平均年棒にいたっては3倍以上なのですから、貧富の格差は歴然としています。それにもかかわらず、「カープは巨人に勝つ」というのが、素晴らしいことなのですよ。

球団設立から苦節25年、1975年10月15日、広島カープは初優勝しました。この時、私は東京で暮らしていました。しかし、日払いの肉体労働をして食いつないでいるという、その日暮らしのフリーター生活であったのです。移動中のマイクロバスのラジオから、「広島カープ優勝！」という興奮した音声が突然流れてきました。当時、私は野球にも、カープにも関心はありませんでしたが、郷土のチームの快挙の報に、胸がジーンと熱くなったのを覚えています。その翌年、私は6年間の東京での生活に終止符をうち、郷里の広島に帰りました。そして、縁あって地元の花市場に就職し、新たな人生を歩み始めたのです。

「ゼニはのうても、ガンバルのがカープよ。よそへ行ったら、また暑いモンを育てりゃあ、ええじゃないの」